

Chaucer の *The Man of Law's Tale* における “Joye after Wo”

柴 田 竹 夫

1

チ ョ ー サ ー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) の *The Man of Law's Tale* (「法律家の話」)⁽¹⁾ (以下 MLT と記) は、ローマ皇帝の娘クスタンス (Custance) が二度にわたり小舟に乗せられて海に流される苦難と、キリストによる奇蹟の話である。制作年は1390年頃と推定されている。⁽²⁾

MLT の語り手 The Man of Law は彼の話を語り終えると、次の様に神に祈りを捧げる。

Now Jhesu Crist, that of his myght may sende

Joye after wo, governe us in his grace,

And kepe us alle that been in this place! Amen

(II [B'] 1160-62) (my italics)

ここで “joye after wo” とはクスタンスが現世の「苦難」 (“wo”) に満ちた孤独の8年以上の歳月の後、無事故郷ローマの父のもとに戻った時の彼女の「喜び」 (“joye”) を踏まえた言及である。しかしクスタンスの「喜び」とはいかなるもので、どの様な意味を持つものであろうか。恵み深きキリストは現世の人間をどの様に治め、どの様にお守り下さるのか。父の意志ゆえ、異教徒の国シリア (“Surre”) へと嫁いでいくことを気の進まぬままに承知し、両親との別れに際し、涙を流しながら、二度と再び相まみえることもないだろうし(280)、死んでも構わない(285) と言うほどに悲愴な覚悟をクスタンスは示す。その際我が

身を「汝惨めな子」(“thy wrecched child”)(274),「追放されし女」(“wrecche [=exiled]⁽³⁾ womman”(285) と呼ぶクスタンスは、現世での身の置き所を心得ていると言える。というのも異教徒であるサルタン (“The Sowdan”)(177)との結婚は、サルタンとその家臣のことごとくが、マホメット教からキリスト教に改宗する(240)ための交換条件であって、サルタン側とローマ皇帝側双方の合意に基づくものであるからである。つまりクスタンスの結婚は、ローマ側からすると、キリスト教の異教国への布教(237)という重要な使命を担っている。クスタンスはローマ皇帝の娘 (“the Emperoures doghter, dame⁽⁴⁾ Custance”)(151)としてキリスト教の布教を担う自分の役目、立場を十分に認識しつつも、一人異教の国へと嫁いでゆかねばならぬか弱き身の上を振り返り、不幸で、惨め (“wrecched”)そして流浪の身 (“wrecche”)であると慨嘆するのである。この様な哀れなクスタンスをキリストはどの様にお守り下さるのであるか。いかなる艱難辛苦 (“wo”)を経て彼女は喜び (“joye”)へと帰り着くのであろうか。

語り手は語りの要諦について次の様に言う。

The *fruyt*⁽⁵⁾ of this matiere is that I telle. (411)

Me list nat of the chaf,⁽⁶⁾ ne of the stree⁽⁷⁾

Maken so long a tale as of the corn.⁽⁸⁾

.....

The *fruyt* of every tale is for to seye: (701-6) (my italics)

語り手が聴衆(読者)に伝えんとする話の本質を語る事が語りの要諦なのである。⁽⁹⁾ここで“fruyt”の比喩表現は単に語りの時間の節約の口実としてあるだけでなく、語り手は話の本質とは何かを認識したうえで語るわけで、聴衆(読者)は語り手の語る“fruyt”とは何かの判断を下すよう迫られているわけである。

本稿において、“wrecche”なクスタンスを通して、語り手のいう“joye after wo”の“fruyt”を考察することにする。

2

クスタンスの“joye after wo”の考察にあたって、まず彼女の“wo”から始める。更に彼女の“wo”の考察にあたって、まず彼女が経験する四つの苦難の状況を通してみることにする。その状況とは次の様なものである。

- (1) 異教徒サルタンとの結婚のためシリアに向けてローマからの出立
- (2) シリアから小舟に乗せられて海を漂流すること
- (3) ノーサンバランド (Northumbrelond) に漂着し、そこでアラ (Alla) 王のもとに身を寄せるが、奥方のヘルメンギルド (Hermengyld) 殺害の容疑を掛けられること
- (4) ノーサンバランドから追放されて再び小舟で海を漂流すること

これら四つの苦難の状況を順に検討していく。⁽¹⁰⁾

まず第一の苦難について。シリアのサルタンがクスタンスを望んだが、直接彼女を見ての事ではない。サルタンの愛顧を受けていたシリアの商人たちが、商用で行ったローマから戻って、とりわけクスタンスの高き名声 (“So greet noblesse”)⁽¹¹⁾ (185) を真面目に詳しく語るのを聞くと、サルタンは彼女の姿を見ることを強く望み、生涯彼女を愛することが彼の喜びであり、一番の関心であるとまで言う (189-90)。サルタンは見もしない女になぜこれほどまでにひかれるのか。商人たちがローマで耳にし、自分たちの目で確かめもしたクスタンスの評判は、見目麗しいだけでなく、美德をも兼ね備えた高きものである。

This was the commune voys of every man:
“Oure Emperour of Rome — God hym see! —
A doghter hath that, syn the world bigan,
To rekene as wel hir goodnesse as beautee,

Nas nevere swich another as is shee.
I prey to God in honour hire susteene,
And wolde she were of al Europe the queene.

“In hire is heigh beautee, withoute pride,
Yowthe, withoute grenehede or folye;
To alle hire werkes vertu is hir gyde;
Humblesse hath slayn in hire al tirannye.
She is mirour of alle curteisye;
Hir herte is verray chambre of hoolynesse,
Hir hand, ministre of fredam for almesse.” (155-168)

“goodnesse” “beautee” “without pride” “yowthe” “without grenehede(=immaturity) or folye” “humblesse” “curteysie(=graciousness)” “hoolynesse” “freedom (=generosity) といった世評の讃える美德 (virtues) を有する、しかもローマ皇帝の娘という高い身分にある若くて美しい女性であれば、たとえ直接目にしなくとも、サルタンが彼女を生涯愛することが喜びであり一番の関心であると考えたとしても不思議ではあるまい。

そこでサルタンは枢密院に対し (204) ただちにクスタンスを得られねば、死んだも同然と彼女に対する激しい思いを打ち明けて、急ぎ彼の命を救う方策を考え出すようにと命ずる (209)。議論百出後、結婚以外に方策はないが、マホメット教のもとに子を嫁がせるキリスト教を信仰する王は居ないだろうという結論に達する。それに対してサルタンは、キリスト教に改宗する、この苦しみ (“wo”) (231) にはこれ以上耐えられない、そして命を救ってくれと皆の者に言う (225-231)。サルタンの苦しみの原因であるクスタンスが彼を改宗させたことは、敬虔なキリスト教徒である女性としての勝利である (彼の結婚の動機を考えると手放しでは喜べないが)。ところがクスタンスにとってサルタンとの結婚は、はじめから気の重い、悲しみに満ちたものである。ローマにあって高

き名声を抱いた生活はどれほど幸福なものであろうか。結局サルタン、貴族たち、家臣たちが皆キリスト教に改宗する(240)代わりに、サルタンとクスタンスとの結婚が取り決められる。

この時のクスタンスの悲しみ、苦しみとは次の様なものである。

(1) 彼女を慈しんでいた友人たち (“freends that so tendrely hire kepte”) (269) から離れ一人異教徒の国に送られること (夫となる男はキリスト教に改宗するとはいえ)

(2) 夫の支配のもとに縛られ (“be bounden”) (270) ねばならないこと

サルタンとの結婚は、彼女にとって望外のものである。マホメット教の撲滅とキリスト教の布教を目指して、協定、交渉、そして教皇と全教会と全騎士団の助力を得て、ローマ皇帝がサルタンと契約を結んだ (“acorded”) (238) のである (233-8)。従って皇帝の父がいかに威厳があり (“his grete noblesse”⁽¹²⁾) (248), 嫁入り仕度がいかに立派なものであり、いかに嫁入りのお供の者たちが大勢であろうとも、そして全市民に対しこの結婚に神の祝福を祈るよう布告が出されても、それらは彼女の深い悲しみ、苦しみを到底癒すことは出来ない。彼女の結婚のための出立の日は、「運命の苦しみに満ちた日」 (“the woful day fatal”⁽¹³⁾) (261) と語り手も語る如くである。クスタンスは、“wrecche (=exiled) womman” (285) であって、親、友人たちからも遠く離れて、孤独な寄る辺なき故郷を追放された流浪の身になること、そしてその状況に絶望することはないが、それを自らどうすることも出来ないことを自覚している。

Custance, that was with *sorwe* al overcome,

Ful *pale* arist, and dresseth hire to wende;

For wel she seeth ther is noon oother ende. (264-6) (my italics)

このトリヴェ (Nicholas Trivet) の原典 (*Chronicle*) に該当箇所は無い “wrecche” という形容詞は、クスタンスの置かれた “woful” な状況をよく表している。

苦痛に満ちたクスタンスの姿を伝えるのに特に二つの形容詞が目につく。一つは“woful”であって、彼女の置かれた厳しい状況を表す形容辞 (epithet) として MLT において三度使われる。まずローマからシリアにむけての船出の際、語り手はこう言う。

To shippe is brought this *woful* faire mayde

Solempnely, with every circumstance (=ceremony). (316-7)

(my italics)

次に、シリアから一人舵のない小舟に乗せられて悪徳のサルタンの母により追放され、三年以上の間海を漂流し、ようやくノーサンバランドに漂着し、そこで城主は、苦痛に満ちたクスタンス (“This woful womman”) (522) を城に運ぶ。三つ目は、三度目の漂流中にローマの元老に助けられた時のこと (978) である。

“woful” と並んで、惨めな状況にあるクスタンスの epithet として “wrecched (=miserable, unhappy)”⁽¹⁴⁾ がある。二度使われていて、まずシリアに嫁いでゆく際、両親に別れの挨拶を言う時、自らを指して、「汝惨めな子クスタンス」 (“Thy wrecched child Custance”) (274) と言う (トリヴェの原典に該当箇所は無い)。

孤独の苦しみも大きなものだが、クスタンスにとっては夫の支配による束縛の苦しみも大きなものである。彼女は次の様に親に訴える。

Wommen are born to *thraldom*⁽¹⁵⁾ and *penance*,⁽¹⁶⁾

And to been under mannes governance.⁽¹⁷⁾ (286-7) (my italics)

女は結婚すると夫の支配のもとに縛られる (270) という語り手の言葉に続いて、ここではクスタンス自らが、女は生まれながらに男の支配のもとにあって隷属と苦難 (cf. 710) のもとにある存在であると自ら言い聞かせることによって、この身は死んでも構わないと言うほどの身の不幸を自ら納得させようとし

ている。この箇所はチャーサーによる付加 (273-87) の一部であってトリヴェ
の原典には無い⁽¹⁸⁾ ことに注目しなければならない。

3

クスタンスの苦難の状況の二つ目に、彼女がシリアから追われ小舟に乗せら
れて、海上を三年以上にわたり漂流するという“wo”について考察する。この
苦難は、語り手が「悪徳の源泉」(“welle of vices”)(323) と呼ぶほどの邪悪な
女、サルタンの母がもたらすものである。クスタンスの美德を讃えるのに語り
手は、七行 (162-68) を費やしたが、サルタンの母に対する apostrophe (頓呼
法) を三度、exclamation を四度使用して強調しながら、七行 (358-64) を費
やして、聴衆に彼女の悪徳を訴えかける。

O Sowdanesse, *roote of iniquitee!*

Virago, thou Semyrame the secounde!

O *serpent* under femynnytee,

Lik to the *serpent* depe in helle ybounde!

O *feyned* womman, al that may confounde

Vertu and innocence, thurgh thy *malice*,

Is bred in thee, as *nest of every vice!* (358-64) (my italics)

“roote of iniquitee(=evil)”⁽¹⁹⁾ “serpent” “feyned” “malice” “nest of every
vice” といった言葉から言えることは、クスタンスとサルタンの母は、善悪の
対称形をなしており、まるで写真のポジとネガの関係にあり、サルタンの母の
悪徳は美德のクスタンスに対する試練の働きをなしている。

邪悪なサルタンの母が、息子がクスタンスと結婚することには絶対に反対す
る (330-43) 理由は、キリスト教への改宗によって、自分たちの体に隷属
 (“thraldom”) と苦難 (“penance”)(338) がもたらされ、最後には地獄

（“helle”）（339）に落ちはしないか非常に恐れるがため、と同時に自ら国を治めたいという支配欲のため（434）である。サルタンの母の“thraldom”と“penance”という言葉によって、先に論じたクスタンスの結婚における“thraldom”と“penance”の恐れが強調されると同時に、ここでクスタンスへの迫害が宗教上の理由によるものであることがわかる。

悪魔に唆されたイヴに譬えられる（368）サルタンの母は卑劣なはかりごとを密かに巡らし、このキリスト教徒の結婚を破滅させようと計る（369）。彼女の顧問官たちは、全員彼女に味方することを誓い、出来るかぎり友人たちを集めようと約束する。この様にサルタンの母は悪の徒党を組んで（347）（cf. 269, 433, 658, 1150）、クスタンスをはじめとするキリスト教改宗者たちに卑劣な行為（“cursed dede”）（433）で対抗し、クスタンス達キリスト教徒の共同体とは対照的な姿を見せる。

サルタンの母は、うわべはキリスト教に改宗することを願い、長く異端であったこと（376-8）を悔やみ、クスタンスをあたかも我が娘を迎える如く、厳かに迎える。しかしそれは偽りの甘言（“flaterynge”⁽²⁰⁾）（405）であって本心ではキリスト教徒の皆殺しを謀る。「この蠍、この邪悪な悪魔」（“this scorioun,⁽²¹⁾ this wikked goost”）（404）は、キリスト教徒を招いての饗宴において、クスタンス一人を除いて、サルタンをはじめキリスト教徒を皆殺しにする。クスタンスは直ちに彼女が持ってきたいくらかの財宝と多くの食料と衣服と共に（442-4）、舵のない（“steereless”）（439）小舟に乗せられて、塩辛い海（“the salte see”）（445）に一人追放される。“salte see”はMLTにおいて四度（445, 830, 1039, 1109）使われて、苦難の場所や、風と波に翻弄されて、行く末判らぬ人生そのものを表していると考えられる。

この三年以上にわたる塩辛い海での漂流がいかに苛酷な辛いものであったかは、父との再会の時のクスタンスの訴えからよく分かる。この再会の時に彼女は故郷からもう二度と追放しないでと父ローマ皇帝に切に願う。

“That whilom ye han sent unto Surrye.

It am I, fader, that in *the salte see*
Was put *allone* and *dampned*⁽²²⁾ *for to dye.*
Now, goode fader, mercy I yow crye!
Sende me namoore unto noon hethenesse, (1108-12) (my italics)

「孤独」なクスタンスは「塩辛い海」で「死ぬように運命付けられ」ていると信じていたのである。更にはこの苦難がいかばかりのものであったかは、語り手が次の様にクスタンスは幾度も死を待ち望んだかもしれないと言うのを聞く時に分かる。

On many a sory meel now may she bayte;
After hir *deeth* ful often may she wayte,
Er that the wilde wawes wol hire dryve
Unto the place ther she shal arryve. (466-9) (my italics)

またノーサンバランドに漂着した時、城主にむかって、死によって“wo”から抜け出すことを口にするということからも分かる。

In hir langage mercy she bisoghte,
The lyf out of hir body for to twynne (=separate),
Hire to deliverre (=save)⁽²³⁾ of *wo* that she was inne. (516-8)
(my italics)

この時やつれた (“this wery womman ful of care”)(514) クスタンスの苦難 (“wo”) とはつまり「孤独」と「追放」の苦しみのためである。

クスタンスの“wo”について、三つ目に彼女がシリアを追われて三年以上の漂流の後、ノーサンバランドの海岸に漂着し、そこで城主に助けられた後、城主の奥方殺害の嫌疑がかけられるという苦難について考える。この苦難のもとになったのは一人の若い騎士で、この男がクスタンスに対し激しい邪な恋心を抱き (586)、彼女を口説こうとするがままならず、そこで彼女に恥ずべき死 (592) をもたらそうと企み、ひそかに部屋に忍び込み、寝ている城主の奥方ヘルメンギルドの首を短刀で掻き切って、その短刀を寝ているクスタンスの側に置いていったことに始まる。当然殺害の嫌疑はクスタンスにかかる。

語り手は言う。この騎士がクスタンスを誘惑しようとしたのは、人を欺かんと、てぐすね引いて待っている (582) 悪魔の誘惑 (“Sathanas temptaciouns”) (598) に乗せられてのことであると。サルタンの母が、人を欺く道具 (“instrument”) (370) として悪魔に使われた如く、ここでもこの騎士は悪魔の誘惑に乗って人を陥れる悪魔の道具として働く。

それではこの時のクスタンスの苦しみはいかばかりであったか。チャーサーは、クスタンスを気絶させることによって彼女の激しい悲しみの感情を表す。血まみれの短刀が彼女のベッドの側で見つかった時、クスタンスはあまりの苦しみに耐え切れずに気を失う。

For verray *wo* hir wit (=mind) was al aweye. (609) (my italics)

あまりの苦しみに耐え切れずに気を失うのは、アラ王との再会時にも起こる。

Twyes she swowned in his owene sighte; (1058)

立て続けに彼女は彼の面前で二度も気絶する。また語り手は、アラ王の前に引き出され、王の裁きを受けるクスタンスのことをこう言う。

For as the *lomb* toward his deeth is broght,
So stant this *innocent* (=sinless person)⁽²⁴⁾ bifore the kyng. (617-8)
(my italics)

罪無くも非力なクスタンスの姿である。人々は彼女のことを有徳で (“*vertuous*”) (624), 自分の命の如くヘルメンギルドを愛していたと口々に証言するが、悲しいことに彼女を弁護してくれる者 (“*champioun*”) (25) は誰ひとりいないのである。トリヴェの原典にはこの箇所に対する該当箇所は無い。

Allas! Custance, thou hast *no champioun*,
Ne fighte kanstow noght, so weylaway! (631-2) (my italics)

An Emperoures doghter stant allone;
She hath *no wight* to whom to make hir mone. (655-6) (my italics)

孤立無援の孤独なクスタンスの姿である。この「孤独」な姿はローマを出て以来、現世におけるクスタンスの基本的な姿である。

5

クスタンスの “*wo*” について、四つ目は、ヘルメンギルド殺害の嫌疑が晴れて、その後めでたくアラ王の妻となったクスタンスだが、アラ王の母ドネギルド (Donegild) の奸計によって、ノーサンバランドからアラとの間にできたまだ赤子のマウリシウス (Mauricius) と共に小舟に乗せられて、再び海に追放されるという苦難である。その苦難の元凶がドネギルドなのである。語り手は、サルタンの母同様邪悪なドネギルドの悪徳ぶりを、四度の *exclamation* と五度の *apostrophe* を用いて強調しながら、次の様にクスタンス、サルタンの母の時と同様に、七行にわたって聴衆に訴えかける。

O Donegild, I ne have noon Englissh digne (=fit)
 Unto thy *malice* and thy *tirannye*!
 And therefore to *the feend* (=Satan) I thee resigne(=consign);
 Lat hym enditen (=write) of thy traitorie (=treachery)!
 Fy, *mannysh*,⁽²⁶⁾ fy!—o nay, by God, I lye—
 Fy, *feendlych spirit*,⁽²⁷⁾ for I dar wel telle,
 Thogh thou heere walke, thy spirit is in helle! (778–84) (my italics)

“malice” “tirannye” “the feend” “mannysh (=unwomanly)” “feendlych spirit (=devilish creature)” といった言葉は、サルタンの母と一人の騎士が悪魔の道具であったように、ドネギルドも悪魔の様な生き物であることを明示している。

ドネギルドが息子アラ王とクスタンスの結婚を “Hir thoughte hir cursed herte brast atwo” (697) と言うほどに嫌う理由は、異国の女を娶ることは侮辱 (“a despit”) (699) であると考えたからである。そこでドネギルドは、次の様な奸計を企む。アラ王がスコットランドに遠征中、一つは、アラ王宛の手紙を偽の手紙とすり替え、二つは、アラ王の家令宛の手紙を偽の手紙とすり替えることにより、クスタンスを国外追放に追い込んでしまう。第一の偽りの手紙は、クスタンスの産んだ子が 「恐ろしい悪魔っ子」 (“so horrible a feendly creature”) (751) で、その母が「悪鬼」 (“an elf”) (754) であると告げており、それを讀んだアラ王は悲嘆にくれながらも、母子を守るように命じる。しかしその手紙は偽の手紙と再びすり替えられる。この第二の偽りの手紙は、クスタンスの乗ってきた船に母子を手荷物と共に乗せて船出させよ、二度と再びこの国に帰ることはならずと伝えよと、家令に王の命令を告げている。王の命令には逆らえない家令は、王の命令と良心の狭間で苦しみ、罪なき者 (“innocentz”) (cf. 618, 682) が滅び、邪悪な者が栄えることに苦しむ。

“O myghty God, if that it be thy wille,

Sith thou art rightful juge, how may it be
That thou wolt suffren *innocentz* to spille(=die),
And wikked folk regne in prosperitee?
O goode Custance, allas, so *wo* is me
That I moot be thy tormentour, or deye
On shames deeth; ther is noon oother weye.” (813-9) (my italics)

この第二の呪われた偽りの手紙に対し、老いも若きも悲痛な涙を流す。そしてクスタンスは、自分たちが何故追放されなければならないのか全く理由も分からず、死人の様な青白い顔をして、子と共に小舟に乗せられて追放される。

Wepen bothe yonge and olde in al that place
Whan that the kyng this *cursed* lettre sente,
And Custance, *with a deedly pale face*,
The ferthe day toward hir ship she wente.
But nathelees she taketh in good entente
The wyl of Crist, and knelynge on the stronde,
She seyde, “Lord, ay welcome be thy sonde! (820-6) (my italics)

813～826 行における家令及び人々の嘆きと、追放を神の御意志として静かに受け入れるクスタンスの姿は、トリヴェの原典に該当箇所は無く、チャーサーによる加筆である。チャーサーは、家令たちの激しい嘆き、涙と、それと対照的に静逸なクスタンスの姿を通して、敬虔なクスタンスに対する深い哀れみを聴衆に抱かせる工夫を凝らしている。

クスタンスは船出の時に、聖母マリアに対しわが子への慈悲を切に祈る。子の父アラ王の母子に対する仕打ちは無慈悲な(“routhelees”) (863) (cf. “un-kyndnesse,” 1057) もので、罪無き子が何故の咎めを受けなければならないのかという母としての苦しみと悲しみを訴え掛ける。

“O litel child, alas! What is thy *gilt*,
That nevere wroghtest *synne* as yet, pardee?
Why wil thyn harde fader han thee spilt?
O mercy, deere constable,” quod she,
“As lat my litel child dwelle heer with thee;
And if thou darst nat saven hym, for blame,
So kys hym ones in his fadres name!” (855-61) (my italics)

834～868行にわたる哀れな母子像の描写は、チャーサーの加筆箇所である。クスタンスとその子に対する深い哀れみの気持ちを聴衆の心に抱かせる工夫をチャーサーはここでも凝らしている。

以前の小舟に寄せられての追放はクスタンス一人であったが、今回は、子と共に追放されるという母としての苦しみが加わった一層強い苦しみを味わう哀れな女の姿をクスタンスに見る。

6

クスタンスの“wo”に関する四つの苦難の状況を吟味してきたが、ここでこれらの状況をまとめる。一つ目の状況において、両親、友人たちとも別れ、「孤独」に陥ることと、結婚における夫の支配の下「隷属」を受けること、この二つの苦しみをクスタンスは訴えている。二つ目の状況は、サルタンの母により小舟に寄せられて海に一人で追放されるという「追放」と「孤独」の苦しみである。三つ目の状況では、一人の騎士の仕業により「孤独」に陥り四つ目の状況では、ドネギルドにより再び「追放」と「孤独」の苦しみを味わうと共に、子を思う母の苦しみをもち受ける。

こうした苦難の状況から言えることは、クスタンスの“wo”は、

- (1) クスタンス一人あるいは母としての苦しみを伴う母子二人の「追放」と「孤独」の苦しみ

(2) 結婚における夫の支配による隷属の苦しみ

という二つの苦しみによるものであることであり、それらは、彼女の内から来るものではなく、すべて彼女の外から来る。

クスタンスはこの(1)、(2)の苦しみにすべて耐える忍耐の女性である。彼女は彼女に掛かる苦難をすべて神の思し召しと考えて、嘆きはすれど、絶望することもなく、静かに受け入れるだけである。

7

これら苦難の状況からは、クスタンスの悪魔(“Sathan”)との戦いと彼女の勝利の姿が見える。特にサルタンの母とクスタンスに懸想した騎士の二人は、悪魔の誘惑に乗った「悪魔の道具」(cf. 365, 582, 598, 780, 783)として彼女に襲いかかる。ドネギルドは「悪魔の道具」とは呼ばれていないが、悪魔の様な生き物(783)として、実質的には「悪魔の道具」として働いている。これら悪魔との戦いにクスタンスが勝利するのも、美德を有する彼女がキリストに救いを祈り、それが適えられるからである。

クスタンスは第一の追放の時に、聖十字架に向かって哀れな声で悪魔から守ってくださるようにと祈りを捧げる。

“O cleere, o welful auter, hooly croys,
Reed of the Lambes blood ful of pitee,
That wessh the world fro the olde iniquitee,
Me fro *the feend* (=Satan)⁽²⁸⁾ and fro his clawes kepe,
That day that I shal drenchen in the depe.

“Victorious tree, proteccioun of trewe,
That oonly worthy were for to bere
The Kyng of Hevene with his woundes newe,

The white Lamb, that hurt was with a spere,
Flemere of *feendes* out of hym and here
On which thy lymes feithfully extenden,
Me kepe, and yif me myght my lyf t'amenden." (451-62) (my italics)

451～462行はトリヴェの原典に該当箇所は無い。クスタンスはこうも言う。

... "Sire, it is *Cristes myght*,
That helpeth folk out of *the feendes snare*." (570-1) (my italics)

キリストだけが人間を悪魔の罠（誘惑）から救い出すことが出来るのである。
語り手も、キリストの御力についてこう言う。

But he that starf for our redempcioun,
And boond *Sathan* (and yet lith ther he lay),
So be *thy stronge champion* this day!
For, but if *Crist* open *myracle* kithe(=reveal),
Withouten gilt thou shalt be slayn as swithe. (633-7) (my italics)

これはトリヴェの原典には該当個所の無いところで、アラ王の裁きの前で、孤立無援のクスタンスにはキリストの御力以外に悪魔から助かる道は無い。結局美德のクスタンスは、神の御力、奇跡により、悪魔との戦いに勝利し、四つの苦難を乗り越えることが出来るのである。

次に四つの苦難の各々において、神と共に聖母マリアがいかにクスタンスに力("myght")と気力("vigour")をお与えになったのかをより具体的に吟味する。

シリアにむかってローマを出立する時に、クスタンスは愛する母への呼び掛けの中でキリストが実は彼女にとっての最大の喜び("my moder, my sover-

ayn plesance/Over alle thyng, out-taken [=except] Crist on-lofte”) (276-7) であると明言し、キリストの御恵みを祈る。

But Crist, that starf for our redempcioun
So yeve me *grace* his heestes to fulfille! (283-4) (my italics)

276～277 及び 283～284 行は、トリヴェの原典に該当箇所は無い。

この後三年以上も海上を漂流するが、語り手は聴衆に次の様に問い掛ける。

Men myghten asken why she was nat slayn
Eek at the feeste? Who myghte hir body save? (470-1)

Now sith she was nat at the feeste yslawe,
Who kepte hire fro the drenchyng in the see? (484-5)

クスタンスを迎えての宴席において、彼女一人が助かり、サルタンを含めキリスト教徒の皆が虐殺されてしまうが、このことに対し、語り手は言う。神が御業 (“his myghty werkis”) (478) を人間に示す為に「奇蹟」 (“miracle”) (477) をお示しになるのだと。

God liste to shewe his wonderful *miracle*⁽²⁹⁾
In hire, for we sholde seen his myghty werkis;
Crist, which that is to every harm triacle,
By certeine meenes ofte, as knowen clerkis,
Dooth thyng for certein ende that ful derk is
To mannes wit, that for oure ignorance
Ne konne noght knowe his prudent purveiance. (477-83) (my italics)

また語り手はこうも聴衆に問い掛ける。

Where myghte this womman mete and drynke have
Thre yeer and moore? How lasteth hire vitaille? (498-9)

これに対しても語り手は、それは神の「偉大な奇蹟」(“greet mervaille [= miracle]”⁽³⁰⁾) (502) によるものだと説く。470～504行はトリヴェの原典には該当箇所は無い。

神の御意志の現れは、クスタンスの小舟がノーサンバランドの砂浜に「しっかりと」(“stiked so faste”)(509) 漂着したことに看取れる。神の御意志により彼女がそこに留まることになると語り手は明言する。

That thennes wolde it noght of al a tyde;
The wyl of Crist was that she sholde abyde. (510-1) (my italics)

ノーサンバランドに滞在中、クスタンスがしじゅう苦い涙にくれて祈りを捧げるのを見て城主の奥方ヘルメンギルドは、キリストの御恵みによりキリスト教に改宗する。

In orisons (=prayers), with many a bitter teere,
Til *Jhesu* hath converted thurgh his *grace*
Dame Hermengyld, constablesse of that place. (537-9) (my italics)

更に異教の国にあって密かにキリスト教を信仰する一人の盲目の男がヘルメンギルドに対してキリストの名において(561) 再び目が見える様にしてほしいと願うと、ヘルメンギルドは、キリストへの愛故に夫に殺されるのではないかと恐れるが、クスタンスは彼女を勇気づけて、「キリスト教会の娘」(“doghter of his chirche”)(567) としてキリストの御意志 (“The wyl of Crist”)(567) を行

うように指図する。この「キリスト教会の娘」という言葉は、後にクスタンスのことを、神の声が「聖教会の娘」(“The doghter of hooly chirche”)(675)と呼ぶのに呼応している。キリストの御意志が行われるのを見て、城主がこれはどうしたことかと尋ねると、クスタンスは、キリストの御力によります (571) と答え、キリスト教を説いてついには城主をもキリスト教に改宗させてしまう (574)。

クスタンスは聖母マリアにも救いの祈りを捧げる。ヘルメンギルド殺害の嫌疑がクスタンスにかかり、不運にも彼女を進んで弁護するものが誰もいないという (631-2) 苦境に陥った時のことである。

“Immortal *God*, that savedest *Susanne*
Fro false blame, and thou, merciful mayde,
Marie I meene, doghter to Seint Anne,
Bifore whos child angeles synge Osanne,
If I be giltlees of this felonye,
My socour be for ellis shal I dye!” (639-44) (my italics)

631～658 行はトリヴェの原典には該当箇所は無い。

続いてもう一つの「奇蹟」が起こる。クスタンスに対する憐れみに満たされた優しい心の持ち主アラ王が、聖書を持ってこさせ、真犯人である騎士が、聖書にかけてクスタンスが犯人であると誓ったとたん、一つの手が (669) その騎士の首の骨を打ち、騎士は石ころのように倒れ (670)、両目が顔から飛び出す (671)。その時裁きの場にいた皆の耳に一つの声が (672) 聞こえる。

... “Thou hast desclaundred (=slandered), giltlees,
The doghter of hooly chirche in heigh presence;
Thus hastou doon, and yet holde I me pees!” (674-6) (my italics)

その裁きの場に居るものは、この「奇蹟」に恐れ驚き、罰におののく。ただクスタンスだけは恐れも驚きもしない(679)。この静かに「奇蹟」を受け入れるクスタンスの抑制され、秩序だった身振りは、彼女の魂の美しさを表している。⁽³¹⁾この身振りはMLTにおけるクスタンスの一貫した身振りである。クスタンスは祝福されたか弱き罪無き子 (“sely⁽³²⁾ innocent”)(682)であったわけで、邪な疑いをかけた人々は非常な恐れと良心の呵責を抱く。結局この「奇蹟」のために、クスタンスの助けを通してアラ王も裁きの場にいた多くの者たちもキリスト教に改宗し(686)、キリストの恵み (“Cristes grace”)(686)に感謝することになる。

クスタンスは、アラ王の母ドネギルドの奸計にはまった結果、小舟に乗せられて、母子共に国外追放されんとする時にもキリストの御意志を少しも疑わずに、ただ浜辺でひざまづいて (“knelynge”)(825) こう言う。

... “Lord, ay welcome be thy sonde!

“He that me kepte fro *the false blame*
While I was on the lond amonges yow,
He kan me kepe from *harm* and eek fro *shame*
In salte see, although I se nocht how.
As strong as evere he was, he is yet now.
In hym triste I, and in *his mooder deere*,
That is to me *my seyl* and eek *my steere*.” (826–33) (my italics)

この「ひざまづく」という身振り⁽³³⁾は、クスタンスの抑制された秩序だった身振りの一つである。敬虔なクスタンスはただ神の御意志を信じ、聖母マリアを “salte see” にあって帆であり舵であると信じる。

クスタンスは、海上を五年以上漂流したあげく、キリストの思し召し (“Cristes sonde”)(902)によって浜辺に打ち上げられる。ある晩のこと、城主

の家令がキリスト教の信条を侵す盗賊 (“a thief”)(915) となって一人クスタンスの小舟にやって来て、彼女を我がものにしようとする。クスタンスは必死に戦う。

Wo was this wrecched womman tho bigon;
Hir child cride, and she cride pitously.
But blisful (=blessed) Marie heelp hire right anon;
For with hir struglyng wel and myghtily
The thief fil over bord al sodeynly,
And in the see he dreynte for vengeance (=retribution);
And thus hath Crist unwemmed (=undefiled) kept Custance. (918-24)
(my italics)

この様に忌まわしき色欲 (“foule lust of luxurie”)(925) に溺れた男は、天罰を受けて、海に落ち溺れ死ぬ。かくして聖母マリアとキリストは、ひたすら神を信じる敬虔なクスタンスの純潔を守る。

ここで語り手は、聴衆に問い掛ける。いかにしてこのか弱い女 (932) がこの不埒な男に抵抗する力を持ったのかと。それに対し語り手は、「神の恵み」 (“Goddes grace”)(938) が彼女に「力」 (“myght”) と「気力」 (“vigour”) を与えたもうたのだと明言する。932~945行はトリヴェの原典に該当箇所は無い。

三度目の漂流中にも聖母マリアはクスタンスに救いの手をさしのべる。

Thus kan Oure Lady bryngen out of wo
Woful Custance, and many another mo. (977-8)

クスタンスは、キリストの御意志を疑うことを知らない美しい魂を持って、ある時はヘルメンギルドが盲目の男を目が見えるようにするのを助け、また別

の時にはアラ王達のキリスト教改宗を助ける。更に神は汚らわしい姪欲 (925) に対する勝利をクスタンスにもたらず。キリストは、あらゆる “harm” つまり “wo” (cf. 427) に対する「癒し (“triacle”=medicine, remedy)(479) の神」なのである。この様にしてキリストと聖母マリアの御助力を常に祈る「聖教会の娘」(675) としてクスタンスには常に「神の御恵み」が与えられるのである。

8

神の御恵み (938) によって力と気力を得たクスタンスであるが、彼女の美德を考える上で一つ注目しておくことがある。それは語り手は 155~168 行において、世評の讃えるクスタンスの美德を列挙しているが、その中でも “hooly” 及び “hoolynesse” を、特にチャーサーは、MLT において強調していることである。

クスタンスを修飾する epithet の移り変わりからも神の御恵みは彼女の美德によるものであることがわかる。クスタンスは初めに “the Emperoures doghter, dame Custance”(151) と高貴な女性の尊称としての “dame” の形容詞をつけられて登場する。この “dame” の epithet は話の終わりまで一貫して計八回 (ll. 151, 184, 245, 431, 601, 608, 1033, 1147) 使われる。彼女の美德を表す epithet としては、“faire” (ll. 245, 316, 719), “full of benignytee” (446), “so benigne” (615), “goode” (817) があるが、特に注目しなければならないのは、“hooly” である。クスタンスは “verray chambre of hoolynesse (=virtue)”⁽³⁴⁾ (167) とうたわれ、451~462 行における聖十字架への彼女の祈りに “hoolynesse” が看取れる。四つの苦難な状況を経て、神の御恵みを受けていることがわかるにつれて “hooly” なクスタンスであることがますます明らかになる。まず “The doghter of hooly chirche” (675) に始まり、“This hooly mayden” (692), “ful hooly thynges” (709), “an hooly entente” (867), “his hooly wyf so sweete” (1129), “in hooly almus-dede” (1156) と続き、最後に “this hooly creature” (1149) としてローマに帰還する。

MLTにおける「時間」にも彼女の“hoolynesse”が表れている。クスタンスの漂流は八年以上にもわたるが、この8という数字を考えると、不変の信仰心を持つクスタンスの永遠性との繋がりが当然考えられる。8という数字は regeneration, eternity, perfection のシンボルである。⁽³⁵⁾ トリヴェの原典では12年である。八年という8の数字からは、8のシンボル化つまりクスタンスの「永遠性」が強調されていると考えられる。

この様なクスタンスの“hoolynesse”をまわりの人々が、どの様に見ているかと言うと、明らかにそれを認めていることが分かる。それは次の五つの箇所から伺える。

- (1) 語り手の語る 156～168 行における彼女についての世評において
- (2) ノーサンバランドの城の人々に大変気に入られることにおいて(530-32)
- (3) ヘルメンギルド殺害の嫌疑が掛かった時も、人々は彼女が有徳である(624) ことを知っており、ヘルメンギルドの家の者たちは皆そのことで裁判の証人にたつ(626) ことにおいて
- (4) クスタンス母子の国外追放を命じるアラ王の偽の手紙を見た時、城内の者は老いも若きも涙を流す(820) ことにおいて
- (5) クスタンスがアラ王による国外追放のため小舟にむかう時、人々は皆彼女の後にしたがっていく(865) ことにおいて

先にあげた“hooly”の epithet の配列とこれら五箇所の推移を比べれば、それは明らかである。

以上吟味してきたことから言えることは、“dame”を名に冠するクスタンスから“The doghter of hooly chirche”として、“hooly”を名に冠するクスタンスの顕在化である。そしてそれを人々は認めている。

それでは“hooly”なクスタンスは、苦難(“wo”)の道を歩んだ後、どの様な

喜び (“joye”) を得たのであろうか。クスタンスの苦難とは、先に検討した様に、二つあって、一つは追放に伴う「孤独」の苦しみであり、もう一つは夫の支配による「隷属」の苦しみであった。だが夫による苦しみについては、結婚前にサルタンは殺されてしまうし、アラ王との結婚においても、新婚の床における必然を忍耐強く受け入れ、しばし妻の “hoolynesse (=chastity)” を横に置いておくこと (710-3) 以外語り手は、はっきりとはクスタンスの受けた結婚における隷属 (“thraldom”) と苦難 (“penance”) は語っていない。

ノーサンバランドへ共に戻り、クスタンスと「キリスト教徒の華」 (“of Cristen folk the flour”) (1090) とうたわれるアラ王の二人は、 “they lyve in joye and in quiete” (1131) と静かで幸福な生活を送ることから、クスタンスは夫の支配による苦しみは大きなものではなかったと考えられる。⁽³⁶⁾

結局クスタンスの “joye” は、主に追放と孤独の苦しみからの解放であったと言える。語り手は、ローマの元老によって漂流中のクスタンスが救われる直前にこう語る。

Til Cristes mooder — blessed be she ay! —

Hath shapen, thurgh hir endeless goodnesse

To make an ende of al hir hevynesse. (950-2)

クスタンスの悲しみ (“hevynesse”=sadness)⁽³⁷⁾ は、彼女がローマに戻った時のアラ王との再会の喜び、それに続く父ローマ皇帝との再会の喜びにより終止符を打つ。アラ王との和解と再会の喜びは、永遠の喜びに次ぐ程の大きな喜びであったが、父ローマ皇帝との再会の喜びもそれに劣らない。

Who kan *the pitous* (=emotionally moving)⁽³⁸⁾ *joye* tellen al

Bitwixe hem thre, syn they been thus ymette?

But of my tale make an ende I shal;

The day goth faste, I wol no lenger lette.

*This glade folk to dyner they hem sette;
In joye and blisse at mete I lete hem dwelle
A thousand fold wel moore than I kan telle. (1114-20) (my italics)*

ローマの友人たちも健在で (1150)、徳と慈善を積みながら、父と娘は死ぬまで離れることもなく共に暮らす。

*In vertu and in hooly almus-dede
They lyven alle, and nevere asonder wende;
Til deeth dparteth hem, this lyf they lede. (1156-8) (my italics)*

この様にして親と友と再会し、孤独の苦しみからクスタンスは解放されたのである。

従って語り手が、MLT の締め括りにおいて “joye after wo” (1161) という時の “joye” とは、追放の苦しみという大きな苦難を経験した後、母子共々 (子は後にキリスト教を信仰する立派なローマ皇帝となる) 「孤独」からも夫の支配の「隷属」からも免れて、死ぬまでキリスト教徒として徳と慈善を積みながら生きるというクスタンスの喜びをさすと言える。

10

クスタンスは、父ローマ皇帝にしろ、サルタンの母にしろ、アラ王にしろ、彼女に対して強い支配力を持つ人間たちの与える厳しい状況、苦難に対して、涙を流しながらも、自らの運命をただ神の思し召しとして受け入れて、いかなる苦境に陥ろうとも神の摂理を疑うことを知らない敬虔なキリスト教徒として、忍耐強く、絶望することもなく、⁽³⁹⁾ 自らの運命をひたすら甘受するが、神の御恵みを受けてこの世の大きな喜びを味わうことの出来た女性として描かれている。

しかしながら、この様なクスタンスの味わう “joye after wo” にはクスタンスのみならず現世における人間が免れることの出来ない基本的な状況がある。語り手は、聴衆に向かってサルタンの母によるキリスト教徒の虐殺に関して次の様に語る。

O *sodeyn wo*, that evere are successour
To worldly *blisse*, spreynd with bitternesse,
The ende of the *joye* of oure worldly labour!
Wo occupieth the fyn of oure *gladnesse*.
Herke this conseil for thy sikernesse:
Upon thy *glade day* have in thy mynde
The unwar (=unexpected) *wo or harm* that comth bihynde. (421-7)
(my italics)

“wo” は、現世の幸福にはつきもので、人間の喜びは結局苦しみに終わること、そしてそれは喜びの背後に潜む予期せぬものであることを、語り手は聴衆に心せよと説いているのである。

しかし語り手は、現世の人間の喜びには苦しみが付きものであることだけを言おうとしているのではない。クスタンスの喜びも長くは続かない。クスタンスがアラ王と共にノーサンバランドにローマから戻った時にも語り手は言う。

But litel while it lasteth, I yow heete,
Joye of this world, for tyme wol nat abyde;
Fro day to nyght *it changeth as the tyde*. (1132-4) (my italics)

That litel while in *joye* or in *plesance*
Lasteth the *blisse* of Alla with Custance. (1140-1) (my italics)

つまり語り手は 現世の喜びの移ろいやすさを言っているのである。クスタンスの“wo”を論じる時には、この現世における喜びの「移ろいやすさ」(mutability)が彼女の“wo”の基本にあることを理解しなければならない。

しかしながらこの mutability は、MLT においては、喜びのそれだけでなく、現世における人間存在そのものの有する mutability (“this wordes transmucacioun”) (I [A] 2839) として、通奏低音の如く話の初めから終わりに至るまで語り手が一貫して強調していることである。MLT において語り手は、次の二カ所においてこれについて言及している。

(1) クスタンスを求めるサルタンのことを語り手は、恋の為に彼は死ぬことが星々の間に書かれていると語る (190-203)。この箇所は、ベルナルドゥス・シルベスター (Bernardus Silvester) を原典とするが、チャーサーによる大きな改変が見られる。チャーサーは人間の死という不運 (“the evil fates”) のみを強調するが、原典では不運と幸運 (“the good fortunes”) の両方を言っている。また原典とは違い、チャーサーは、星の間に書かれていることを人間は読めないとしている。⁽⁴⁰⁾

(2) クスタンスがサルタンとの結婚のためローマを出立しシリアに向かう時、語り手は、火星 (“cruel Mars”) の悪い影響によりこの結婚はだめになると、星の位置を占わなかったローマ皇帝の迂闊さを誹り、クスタンスの出立の日が悪い日 (295-315) であり、“Allas, we been to (=too) lewed (=ignorant) or to slowe!” と人間の無知蒙昧と愚鈍を嘆く。この箇所 (295~315 行) における占星術的説明はチャーサーによるもので、トリヴェの原典には該当箇所はない。

語り手も言うように、星の巡り合わせで決まる人間の死の不運がいつ襲いかかってくるのかは、人間には分からない。またいつ喜びが苦しみに変わるのかも分からないという「移ろいやすさ」(mutability) の中に現世の人間は存在しているのである。

語り手が、MLT の終わりで “joye after wo” と言う時、mutability の中にいる現世の人間にとって、“joye after wo” には “wo after joye” が常に付きま

とっていることを聴衆は当然心得ていよう。⁽⁴¹⁾

MLTにおいて、こうした mutability の中にあって、クスタンスは「変わりなさ」(constancy)⁽⁴²⁾の姿を見せる。クスタンスは苦難の状況を経て、罪もなく (“no synne”)(590)(cf. 856) 純粹で、憐れみの心を失わず、無慈悲さに苦しみもするが、神の御恵みにより、不変の敬虔さを持つて神に救われる。従って語り手の言う “joye after wo” とは一人クスタンスにとっての “joye” であるだけでなく、救いの道を示すクスタンスが与える、現世の mutability に生きる聴衆にとっての “joye” でもあろう。そしてこれが語り手のいう “joye after wo” の “fruyt” なのである。

注

- (1) MLT の引用はすべて Larry D. Benson(ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton Mifflin, 1987) に依る。本文中括弧内の数字は行数を表す。原典参照は, W.F. Bryan and Germaine Dempster (eds.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (Atlantic Highlands, N.J.: Humanities Press, 1958), pp. 155-206 に依る。
- (2) Helen Cooper, *Oxford Guides to Chaucer: The Canterbury Tales* (Oxford: Clarendon Press, 1989), p. 123. Cf. L.D. Benson, p. 854. *MED* も c1390 年とする。
- (3) L.D. Benson, p. 858, note to ll. 285-87.
- (4) *MED* dame n. 3.(a): Used as the title of a woman of rank or position, whether married or not; also as an honorific or mock-serious title. (初出 c 1300, c1390 この箇所引例)
- (5) *MED* fruit n. 2. (c): *fig.* the choice or essential part (of something); meat, gist. (初出 c1390 この箇所及び 1.706 引例)
- (6) *MED* chaf n. 4. Fig. (a): something trivial or worthless, a trifling matter. (初出 c1300, c1390 この箇所引例)
- (7) *MED* strau n. 2. (a): As an image of something worthless, insignificant, or contemptible. (初出 c1300, c1390 この箇所引例)
- (8) *MED* corn n. 2b. Fig. (a): The desired product of anything, something worthy, the best portion. (初出 c1390 この箇所引例)
- (9) Cf. D.W. Robertson, Jr., *A Preface to Chaucer: Studies in Medieval Perspectives* (Princeton, New Jersey: Princeton Univ. Press, 1962), p. 366.
- (10) クスタンスがローマを出て再びローマに戻るまでの足跡を辿ってみると、次の様

になる。

ローマ → シリア $\xrightarrow{\text{(3年以上の漂流)}}$ ノーサンバランド $\xrightarrow{\text{(五年以上の漂流)}}$
→ ある浜辺 $\xrightarrow{\text{(漂流)}}$ ローマ → ノーサンバランド → ローマ

- (11) *MED*, noblesse n. 2. (b): honor, renown, fame; worthiness, praiseworthiness. (初出 c1350, c1390 この箇所引例)
- (12) *MED* noblesse n. 1. (b): majesty, greatness, dignity; royal or kingly nature, mind, or conduct (初出 c1390 この箇所引例)
- (13) *MED* fatal adj. 3. (a): Important in determining personal destiny; fateful (day, honour). (初出 c1390 この箇所引例)
- (14) Norman Davis, et al. (eds), *A Chaucer Glossary* (Oxford: The Clarendon Press, 1983) wrecched adj.
- (15) Cf. *OED* thralldom sb. b. fig.: The state or condition of being a thrall; bondage, servitude; captivity. (初出 1175) See l. 338.
- (16) *MED* penance n. 5. (a): Pain, suffering; affliction, hardship; also, a distasteful task or duty. (初出 c1380, c1390 この箇所引例)
- (17) *MED* governaunce n. 3. (a): Personal control or authority over another or others; protective guidance, keeping or care; subjection, guardianship, tutelage; under~, under (one's another's) control, guidance. (初出 c1390 この箇所引例)
- (18) F.N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (Oxford: Oxford Univ. Press, 1957), p. 693, note to ll. 273-87.
- (19) *MED* iniquite n. 1. (a) (初出 c1390 MLT l. 453 引例)
- (20) *MED* flatering ger. (a): The action of flattering, cajoling, or currying favor; false or delusive praise. (初出 c1230, c1390 この箇所引例)
- (21) common symbol of treachery (L.D. Benson, p. 860, note to l. 404)
- (22) *MED* dampnen v. 4. (b): doomed or destined (to die, to be destroyed, etc.) (初出 c1384, c1390 l. 843 とこの箇所引例)
- (23) *MED* deliveren n. 1. (b) (初出 c1230, c1390 この箇所引例)
- (24) *MED* innocent n. 1. (a) (初出 a1225, c1390 l. 815 引例)
- (25) L.D. Benson, p. 96, note to l. 631. Cf. *MED* champion n. 3.: One who defends, supports or protects another with arms or otherwise; one who champions a cause. (初出 c1300)
- (26) *MED* mannish adj. 2.: Masculine; mannish, unwomanly. (初出 c1390 この箇所引例)
- (27) *MED* fendlich adj. 2. (a): Like the devil, or coming from the Devil; devilish,

- fiendish, monstrous; also, sinful. (初出 a1225, c1390 MLT 1. 751 とこの箇所引例)
 spirit n. 1. (b): a living, rational creature. (初出 a1382, c1390 この箇所引例)
- (28) *MED* fend n. 2. (a): Satan. (初出 ?c1200, c1390 この箇所引例)
- (29) *MED* miracle n. 1b. (a): A miracle performed by God, Christ, angeles, saints, the Cross, etc; also coll.; also, the power of God, Christ, or holy objects to effect miracles. (初出 c1275, c1390 この箇所引例) Cf. 636, 677, 683.
- (30) *MED* merveille n. 1b. (初出 c1300, c1390 この箇所と 1.677 引例)
- (31) 池上俊一『歴史としての身体—ヨーロッパ中世の深層を読む—』(東京: 柏書房, 1992), p. 10-11.
- (32) *MED* seli adj. 2. (c): weak, helpless, defenseless, hapless. (初出 c1300, c1390 この箇所引例) Cf. "wayke (=weak) womman" (932). *A Chaucer Glossary* sely: holy; L.D. Benson, p. 97, note to l. 682, sely: blessed.
- (33) この「ひざまづく」という身振りを, クスタンスは六回見せる。523, 825~826, 1153 行は神への感謝, 638, 834~835 行は聖母マリアへの祈り, そして 1104 行は父に対する敬意を各々表す。
- (34) *A Chaucer Glossary* holynesse n. 1. Cf. *OED* holiness sb. 1.: The quality of being holy; spiritual perfection or purity; sanctity, saintliness; sacredness. (初出 971, c1386 この箇所引例) *MED* holiness n. (2) 2. (a): Sinlessness, virtue, piety, devoutness; purity, chastity; also, an act of piety. (初出 ?c1200)
- (35) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland, 1974), p. 159.
- (36) ただ語り手は次の様な処世訓 ("sentence") (1139)を言う。

Who lyved euere in swich delit o day
 That hym ne moeved outhur conscience,
 Or ire, or talent, or som kynnes affray,
 Envye, or pride, or passion, or offence?
 I ne seye but for this ende this sentence,
 That litel while in joye or in plesance
 Lasteth the blisse of Alla with Custance. (1135-41)

この言葉からアラとクスタンスは, 再会後幸せな一生を送ったが, やはり二人の間には喜びだけではなかったことを暗示しているように思える。

- (37) L.D. Benson, p. 100, note to l. 952. Cf. l. 1145; *MED* hevinesse n.4. (a): Sorrow, grief, woe, dejection. (初出 c1330)
- (38) *MED* pitous adj. 2. (b) (初出 c1390 この箇所引例)

- (39) Cf. *The Parson's Tale* X (I) 1070.
- (40) L.D. Benson, p. 858, note to ll. 190-203.
- (41) Cf. "Joye after wo, and wo after gladnesse" (I [A] 2841) "But after wo I rede us to be merye"(I[A]3068) Bartlette Jere Whiting, *Proverbs, Sentences, and Proverbial Phrases from English Writing Mainly before 1500* (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press, 1968), p. 311, J61. (初出 c1385 この箇所引例)
- (42) クスタンスはトリヴェにおいて Constaunce と呼ばれている。*The Parson's Tale* (X [I] 737)において Parson はこう言う。"Thanne is ther constaunce, that is stablenesse of corage, and this sholde been in herte by stedefast feith, and in mouth, and in berynge, and in chiere, and in dede." "constaunce" の語義は "Stability of character, steadfastness of purpose; also, self-possession; composure, equanimity" (*MED* 1.[a] 初出 1340, c1390 *Pars.* X [I] 737)。チョーサーのクスタンスは Parson のいう "constaunce" の変わらぬ信仰心 ("stedefast feith") を持ち続けている。